

あるアーツに対する
周囲の評価、他

刃狐（旧アーマードこれ）

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したもので
す。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を
超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

大きな事件には必ずと言つていいほどあるアーツの名前が出る。

そんなアーツとよく関わる人達のそのアーツに対する想いや独白。

ある人物にとつては先輩であり、またある人物にとつては相棒であり、また別のある
人物にはお得意様である。

はは、気取った言い方だつたかな？

うん？ 僕にとつても？

そうだね、大事な人間さ。

姉のような存在にとつての縁者でもあるし、なにより僕も個人的に気に入っているし

ね。

あらゆる視点からそのアーツを見てみよう、そんな言葉から始まつたお遊びのようなものさ。

心配しなくとも僕以外は知り得ないし彼等も知られているなんて分からないよ、僕も誰にもバラすつもりは無いしね、僕が喋らなければ誰も知らないのと一緒さ。

それに、これは事実じや無い、僕が演算して予想した結果さ、違つてもただの予想だつた、そつだろ？

さあ、演算を始めようか！

P S O 2 に P S 4 で復帰した記念、オムニバス形式の各人物の安藤に対する考え方などを捏造してみました。

うちの安藤は女の子なので普通に百合百合しいのがあります。

俺の子と違う！ というのは普通の反応です、多々ある安藤のうちの一つと考へていただければ幸いです。

一つ一つが非常に短いので暇つぶしにさえなるかどうか怪しいですし携帯で書いてます故誤字も多いと思います。

目

「おれ」と「センパイ」

「私」と「貴方様」

次

10 1

「おれ」と「センパイ」

まだしつかりと対面せず、ただたゆたうようにフワフワとロビーをうろついていたセンパイを初めて意識したのはおれがアーツとしてナベリウスに降りていた時だ、なんて言うことのないただの警戒散策、ダークーの影響を受けた原生種や稀に出てくるダークーを相手にする、それだけの任務だ。

アーツとはいまだひよつこに過ぎないおれ、いや、おれ達ルーキーは不測の事態に備えて複数人での行動を推奨されている。

でもおれは別に反骨精神とかじやなく、ただ他人との行動が苦手だった、だから一人で任務を遂行する事が多かつたんだ。

不測の事態なんて起きない、起きたとしても事前の連絡はある、アーツが出し抜かれる事なんてない、なんて陽気な事さえ考えながら。

原生種も危険性の高いエネミーは居ないしダークーだって遠距離なら何てことはない、バレットボウのおれとは相性が良かつただけだ。

おれは自分が強いなんて思つたことはないけど、ただ相性が良ければ押される要素なんてないとは思つていた。

おおよそ指定区域を回ったと記録されたマップを見て、テレパイプを手に取った時
だ、ぞわりと嫌な感じがした。

『大気中のダークー因子が急速に増加しています！退避してください！』

「え……？」

テレパイプを持つていたのに逃げる間もなかつた、空間が赤黒く捻じ曲がつたと思つ
た瞬間、黒い巨体が這い出してきたんだ。

「な、なんだよ……コイツ……？」

巨大なダークーがおれを確認するや否や、甲高い悍まし気な咆哮を上げ、両腕を振り
上げた。

「ひつ……?!」

怖かつた、そう言えば、あのダガンでさえ、一撃で人を殺す力を持つていた事を唐突
に思い出した。

逃げようと一步踏み出した時、恐怖の所為か足が縛れ、倒れてしまつた、正直生きた
心地がしなかつたよ、でも助かつた、運が良かつたんだ。

倒れたおれのすぐ上をダークーの巨体が過ぎ去つて、すぐ後ろに生えていた木を容易
くなぎ倒して行つた。

あんなものを食らつたらフォトンによる防御どうこうじや無い、確実に死ぬ、そう考

えた瞬間もう駄目だつた、逃げようと思つてもおれの身体はただ震えているだけで、逃げ出すなんて絶対に無理だつた。

こんな事なら、変な意地なんて張らずに誰かと一緒に来れば良かつたんだ……。

「だれか、だれか……助けて……！」

小さな声が漏れ出した、おれでさえ微妙にしか聞こえないような声、あのダークーの咆哮に容易く焼き消される小さな声に応えるように、ダークーの巨大な顔にも見える目玉のようなコアに、無数のフォトンの刃が突き刺さつた。

「もう大丈夫です、絶対に私が助けますから、安心して下さい」

そう柔らかな声が聞こえると同時に、二本の刃（デュアルブレード）を持つたおれと同じか、それよりも小さな女の子が巨大なダークーを斬りつけていた。

あれほど恐ろしいと思つていたダークーが、そのたつた一撃で大きく仰け反り、呻き声を上げる。

それからはもう、おれには目で追いかけるのがやつとだつた、まるで舞うように宙を踊り、くるりくるりと翻り、ダークーの剛腕による攻撃をまるで花弁のように避けていく。

その間にもダークーに幾十の刃が突き立てられ、まるでその姿と相まって花でも生けるかのようにも見えた。

おれは、その姿を地べたに座りながら見惚れる事しか出来なかつたんだ、ただ、無意識のうちに口から零れた言葉がある。

「綺麗だ……」

まるで宙を跳ねるように、回り舞つたあと12本の刃をダークーに飛ばしながらおれの方にふわりと降り立つた女の子はダークーに背を向けたままおれに手を差し出した。

「す、すぐに増援を……」

おれがそう言うと女の子はキヨトンとしたあと可笑しそうにクスリと笑つて笑顔を浮かべた。

「もう大丈夫です、倒しましたよ」

その言葉に偽りはなく、ダークーはゆっくりと膝をつき、重い音を立てながら倒れて赤黒い粒子とともに消え去つた。

それを見て本当におれは安心したのか、みつともなくボロボロと涙が溢れ始めた、泣き止もうと思つてもおれの思いとは別に独立してゐるかのように止まる事の無い涙に、女の子は目の前に座つておれの体を抱き寄せた。

「いいですよ、怖かつたんですね、泣いてもいいんです、恥ずかしくなんてありませんから、落ち着くまで泣いても、誰も責めたりなんてしませんよ」

「あ、ああ、うう、くう、うわあああああ!!!」

縋り付くように泣き叫ぶおれを、女の子はその胸で受けとめながら、ただおれの頭を女心させるように撫で続けてくれていた。

一体どれだけそうしてくれたのだろう、ようやく涙が収まつたおれはふと気付いた、助けてくれたお礼を言つていなかつたと。

「あ、あの、おれ、イオって言います、助けてくれて、あつ、ありがとうございます！」
「はい、どういたしまして、イオちゃん。私は——」

ふんわりと優しい笑顔を浮かべた女の子は自分の胸にゅつくりと手を当て。

暑苦しい人に言葉を遮られていた。

「どうしたツ!!
元気が無いぞ!!」

そう言いながらおれの顔を覗き込もうとする男の人に対し、少しムツとした表情を浮かべた。おれの頭を優しく抱き込んだ。

「女の子の泣き顔を覗き込むなんて、デリカシーがありませんよ」

そう言われた男の人は大きく仰け反りながらとても狼狽えて、顔の前で両手を振り回していた。

「あー、その、すまない！ほんとうに、すまない！！確かにデリカシーが無かつた！！

これでは六芒均衡失格だし、クラリスクレイスに呆れられてしまう！」

一度咳をして腕を組みながら「王立ちした男の人は大きく頷き、少しだけ顔と視線を逸らしながら。

「すまなかつた！ お嬢さん!! オレは六芒均衡の6！ ヒューアイだ!! 困った事があればオレに言うと良い!! 困ったフォトンを感じたらすぐに飛んでこよう!! ではさらばだ!!」

早口で捲し立てたあとどういう原理か飛び去っていた六芒均衡のヒューアイさんに女の子は苦笑いしながら「決して悪い人では無いと思うんですけどね」と言っていた。

ふと、おれは今もなお女の子に抱き締められていることに気付いて、慌てながら、でもゆっくりと離れ、一つ息を吐いた。

「一緒に、帰りましょうか？」

目を細めながらふにやりと笑みを浮かべる女の子におれは無意識のうちにその提案を受け入れていた。

「でも、その前に……ちょっとお掃除しちゃいましょう」「お掃除って……？」

女の子が背負う武器に指を掛けると大型ダークーが消滅したせいか、姿を隠していた原生種が姿を現し始めた。

あれぐらいなら、おれにも何とか出来る。

「おれも、手伝う」

バレットボウを左手で持ち、フォトンを右手に集めるよう意識しながら弦を引いて、矢を何度も放つた。

それを見た女の子はクスリと笑いながら飛翔剣を仕舞つておれと同じくバレットボウを取り出した。

「お勉強も、少し必要ですね？」

おれと同じように構えているのにその姿はとても綺麗で、胸がドキドキする、凜としていて、でもゆつたりしていて、おれみたいに気を張り詰めていなかつた。

おれが3発撃ちこむ間に女の子は2発、なのに女の子の方は確実に1発で原生種を倒していく、おれも外してはいないので、なぜか女の子の方が早く、正確に原生種を次々撃ち抜いている。

「イオちゃん、早くなくて良いんです、心を落ち着けて、力を入れるのは一瞬だけ、呼吸の内にタイミングがあります、その時に、放つんです」

「は、はい！」

言われた通りに、弓は左手で支えるだけ、心を落ち着けて、深く呼吸すると、確かに自然とフォトンが収縮するタイミングがあつた、特に意識していないのに、ほんの少し

力を右手に込めるとき、驚くほど軽く弦を引いて矢を放っていた。

放った矢は原生種に吸い込まれるように当たり、1発でも倒すことが出来た。それだけじゃ無い、放った直後に続く呼吸でまた、そのタイミングが重なつた、1発目以上に意識せず右手が動く、また別の原生種に命中する。

「凄い……！」

「はい、よくできました」

おれが小さく無い感動と矢を放った余韻を感じている時に女の子は、既に周囲の原生種をみんな倒していた。

こんなに凄い事を教える人はきっと歴戦の大先輩に違い無い。

でも、こんなに小さな女の子がそんなに長くアーツをしているのかと少し疑問に思つた。

「あの、ご指導ありがとうございます！ 失礼な事を聞きますが、いつからアーツに……？」

「そうですね、まだ一月経っていないのでは無いでしょうか？ ですので、敬語はいりませんよ、イオちゃん」

「…………え？」

「一月、経っていない。信じられなかつた、て事は、おれの同期、もしくはおれの少し前

にアーツになつたという事だ。

「あ、でも同期記録にイオちゃんはいなかつたと思ひますので多分イオちゃんの先輩ではありますね、頼つてくれてもいいんですよ！」

得意げに胸を張る「センパイ」におけるは多分、淡い恋心を抱いたんだと思う。

だからおれは、センパイが人と行動するのが苦手なおれを任務に誘つてくれるのが嬉しかつたし、バウンサーの教導官であるカトリさんと楽しそうに会話しているのを見て嫉妬してしまっているのだろう。

おれはセンパイが好きだ、クーナさんのライブに行くついでに会いに来てくれるセンパイの楽しそうな顔が好きだ、ライブに誘つてくれるセンパイを人混みが苦手なので断つた時、ほんの少し寂しそうな表情を浮かべるセンパイを愛している。

でも、この心は秘めて置かなければならぬ、おれとセンパイは、唯一の関係だから、たつた一つの特別な関係だから、おれとセンパイ^{後輩}として、おれは心を隠し続ける。

でもおれはセンパイにとつての特別になりたい、だからおれはこう言うんだ。

「待たせてくれるね、センパイ」

「私」と「貴方様」

「嗚呼、貴方様……如何して貴方様は貴方様なのですか……？」

『哲学的な事を言つてそうでその実何も考えていない、あまり気にしなくていい』
「もうつサガさんつたら！ 私もちゃんと考えていますわ！」

烈火の如く怒る私を軽く流すサガさんに私は諦めてこのお方に縋り付くしかありません、うう、私にもっと力があれば……あ、でも特訓は嫌ですわ！

私、努力せずに強くなりたいんですの、最近のライトノベル？ とかいうものの主人公みたいに、もしくはヒロインみたいに！！

「貴方様あ、サガさんが私をいじめますの～！」

『そうだな、ならば今から特訓とでもいくか』

「ひい！ 鬼！ 悪魔！ ダーカー！ サガさん！」

『なぜその中に私の名を列挙した』

恐怖で腰が抜け私よりも小さな貴方様に縋り付いても貴方様は優しく私を抱きとめてくれる、こんなに嬉しいことはありませんわ！
サガさんとは大違いです！

「ちよつと任務をカトリさんと一緒に行こうと思つていたのですが……特訓なら仕方ありませんね、カトリさん、また今度に」「とんでもない!! 行きます、行きます!! 行かせて下さい!! 特訓は大事です、ええ大事ですとも!! ですが任務はそれ以上に大事です!! ね、ね、サガさん!!」『……まあ、お前と共に行くならばカトリにとつて得難い経験になるだろう、行つてくるといい』

やりました！ 私は勝利を收めましたわ!!

サガさんの地獄の特訓から逃げられた、というのも勿論嬉しいですが貴方様が戦う可憐なお姿をこの目に収めることができる、というのが私にとつて何よりも嬉しいのです。

「さあさあ行きましょう貴方様！ どちらに行かれますか？ ナベリウス原生林ですか？」

「リリーパに……」

「砂漠……ですのね」

「はい……」

暑いのは苦手ですが、仕方ありません、まごついた途端サガさんが凄い睨んできてるのがありありと分かります、このお方との逢瀬を無かつたことにされるわけにはいきま

せんからね！

「さ、さ、行きましょう貴方様！　うふふ、デートですわ、デート！」

「デートだなんて、そんな」

頬を赤らめる貴方様のなんと愛らしいことでしょう、嗚呼、私はどうにかなってしまいそうですわ！

『カトリの言うことは気にしないでくれ、気を付けてな』

「え、こんなの！　こんなの聞いていませんわ～!!」

デュアルブレードを握りながら恥ずかしくもへっぴり腰な私に対峙するはとてもとても大きな蜘蛛型ダークー、ダーク・ラグネ、その希少種族であるダーク・アグラニが空間の亀裂からひよっこりとそのお顔をお見せになられたのです。

サガさんの教えが私の中を駆け巡ります、決して正面に立ってはいけない、法撃力のこもつた刃を幾つも受けのことになる、かと言つて後ろ足に張り付いてもいけない、痛い蹴りを迎えることになる、まずは前足に張り付いて装甲を剥がすことを考えろ、でしたわね！

「どこにでも出てくる恐ろしいダークーではあります、それ故対処法もアーツは心得ています、あなたなどケチョンケチョンにしてやりますわ！このお方が!!」

「私？」無理ですわ、こんなに大きいのなんて受け入れれません!!

「あ、ああ！サガさんの、サガさんの怒りが、呆れが宇宙を超えて届きます？！」
「え？特訓？ソロ？い、嫌ですわ！！」

うう、こんな大きくて赤黒くて硬くて立派なダークーに挑むなんて正気ではありませんわ……。

ですが行くしかありませんのね、では不肖カトリ、いざ参りますわ！！

「ええい！あつ、硬い！予想の5倍は硬いですわ！！ですがチリも積もればなんとやら！この私の手に掛かれることを誇りにお思い下さい！」

えいつやあつ、と意気込んで装甲を切るというか叩いているとふとこんな事を思つてしまします、ギヤザリング用のピッケルで叩いた方が早いのでは？？？

だつてだつて、あちらの方がこと叩く事においては適しているではありませんか！
と、ここでふとあまりにも私に降りかかる攻撃の数が少ない事に気づきます、見てみるとあるとあるお方は私に矛先が向かぬよう流麗に、舞を踊るように立ち回り、私が一度刃を叩きつける間にも五十もの刃を打ち付けていました、それもコア付近に。

「えつ、あれ？サガさんの教えでは脚を破壊することで姿勢を崩しコアを攻撃できる

と言つていたような?!」

サガさん間違いましたわね?!

倒れずともコアを叩く事ができるではありませんか!!

ですが動き回るので全てがコアに当たるというわけではないようで、弾かれるような

硬質な音も幾度か聞こえてしまいます。

ならば私はそのお手伝い、姿勢を崩させると致しましよう！

流石にダークーもあるお方が煩わしかったのかピヨンとその身に似合わず高くお跳びになられ、しかしその巨体通りの振動を伴つて私の眼の前に落ちてこられました。

大きな振動が私の脚を伝い、頭の天辺まで駆け上ります。

まるで縫い付けられるように立ち尽くし、目の前で大きな光が爆ぜたような感覚がして前後不覚に、ひいん、ぐらぐらしますわ！

「わ、私、なんと言われてもここから一歩も動きませんわ?! というより動けませんわ

!!」

助けてくださいまし、貴方様ー！

とは言えあのお方も暇なわけではないので、助けは期待して……ます！

どうかお助け下さい！

「カトリさん！ 大丈夫ですか？！ 今助けてます！」

「嗚呼、貴方様！」

阿吽の呼吸とはこの事ですわ、これで私まだ戦えます！

頭がスッキリ爽快になつた時、私はデュアルブレードを確りと握り直し、フォトンブレードを私が付けた亀裂に幾つも突き立てました。

ですがここからが本番だと言わんばかりに途轍もない硬さで持つて私の攻撃を受け切られたのです。

ですがまだまだこれから、私は気高く舞うのです！！

というちよつとした決意も目前のダークーが地に倒れ伏して黒い粒子となつて消えた事で急速に萎びてしましましたわ。

そもそも、彼我の攻撃力自体に比類し難い差があるのですもの、仕方がありませんわ！

そうですよね、サガさん！

え？ 特訓？ い・や・で・す・わ!!

「カトリさん、お怪我はありませんか？」

「大丈夫です、貴方様のお陰ですわ！」

それにいざとなればフォトンの力で何とかなりますしね。

「良かった、良かったです、本当に……良かった」

さて、ここで私とこのお方の身長差のお話を致しましよう、私実のところ結構身長が高いんですよ、そしてこのお方、結構背の低い可愛らしいお方なんですが……！

今！ 私に!! 寄りかかるように抱きついて!!! 嬉い声を出しているんですよ!!!!

ハアアアアアア（恍惚）!!!

嗚呼、可愛い、とてもとても、可愛らしい！

戦うときはあれ程可憐で美しく綺麗でいらっしゃるのに!!

そうでない時はもう、この上ない程に可愛らしいのです!!

「うふふ、大丈夫ですわ、さあ進みましょ貴方様！ この任務を終えて私はサガさんを見返すのです！」

「…はい！」

「見て下さいカトリさん！ 砂漠ヒラメですって、ふふ、ゴツゴツします！」

「砂漠の中を泳ぐわけですし、表皮も固いのでしょうか」

「あ、今度は貝です！ 貝つて釣れるんですね、初めて知りました！」

砂の中にフォトンでできた糸を垂らし、釣れる魚介類に大喜びする姿はもう、堪らな
いほど可愛いのです。

はあ、もう食べちゃいたいぐらいですわ。

「たくさん釣れたらカフエでご馳走しますね！」

「それは素敵ですわ！期待しておきますわね！」

食べちゃいたい。（二重の意味で）

「ふう、少し疲れちゃいましたね、カトリさん」

「うふふ、さあどうぞ、お水ですか」

「わあ、ありがとうございます！」

あ、～～クツソ可愛いですわあ。

コクリコクリと水筒を両手で支えて喉を鳴らしながら飲む姿は本当にもう、アーツ
の宝ですわね！いいですわゾ～コレ。

「んっ！それじゃあ奥に進んで終わらせましょう！」

「はい！私も気合を入れて行きますわ～！」

心機一転ズンズングングンいざや進めと、全力全快氣力充填した体で一步一步荒野を
歩み進めます、道中現れるダークー機甲種ダークーダークー……前々から思つていまし
たがダークーの出現率高くありません？

「出ませんねえ、スバルダンA……」

「そういう時もありますわ、あっちなんていかがでしよう？」

しょんぼりと眉尻を下げる表情がとてもよし（冷静）。

貴方様の片手を握りしめて先導するように手を引く私は嗚呼なんと成長したのでしょうか、精力的に前へ進むなど、これはもう私大躍進ですわね、サガさんもきっと「お流石はカトリだ、前々から素晴らしいと思つていたがこれはもう特訓は不要だな、カトリ様凄いぞーギやふん！」ぐらい言つてくれるに違いありません。

私には分かりましてよ、なにせ私には特別な知恵がございますから！

とまあ兎にも角にも私の凄まじく、かつ華麗な戦いによつて最奥のダークーも軽く滅し、意気揚々とアーツシップへと戻ると何故かサガさんに軽くメツされました、なん

後日マグが撮影したその時の写真を眺めてほうとしているところに声を掛けられます。

「はあ～い（はあと）」

光の速さで写真を仕舞い、愛しい声のもとへと振り返るとそこには天使がいました。
「えへへつ、オウカテンコウの影を買つたんです、カトリさんとお揃いですね、あの……」
似合りますか？」

は??? 可愛すぎるんですけどこれど???? (半ギレ)

????

「ええ、まあ！ 勿論ですわあ！！ とてもお似合いで可愛らしいですわあ!!」

「えへへ、ちょっと恥ずかしいですね」

んんんんんんんんんんn!!!!

「似合つてゐるなら、嬉しいです！ 他の人たちにも見せてきますね！」

そうはにかんで、パタパタと去つていく貴方様の後姿を見ながら私は、ただ熱い吐息を零すしかありませんでした……。

「ペあるつく、これはもう私たち実は結婚しているのでは……？」

『……カトリ？』

「ねえサガさん、私ね、お父様がそろそろ結婚相手を探そうと見合いをセッティングして
いるのを知つていてるんですよ」

『ああ、まあそれは知つているが……』

「サガさん、私たちつてニューマンとデューマンの別種はもちろん、同性だつて子供を作
れますよね」

『待て、カトリ』

「だから、もちろん同性同士の結婚もできますわよね？」

『落ち着け』

「こりやあもう結婚するしかありませんわよねえ?!」

咄嗟にサガさんが私を羽交い絞めにしますがその程度で止まるほど軟な鍛え方はされていませんことよ?!

「離してくださいいましいいいいい!!!」

『離してたまるかああああああ!!!』

「あの方と!! あの方と私将来を誓い合つてエエエエエ!!!」

『ないイイイイ!!!』

「ぐおおおおおお!!! はあなああせエエエ!!!」

『アザナミ!! 手を、手を貸してくれ!!』

「はーいはーい、落ち着こうねー」